アーカイブ室新聞　（2010 年 4 月 15 日　第 317 号）

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室　中桐正夫

＊　電気が回復し、LAN も引かれた塔望遠鏡室

アーカイブ室新聞 279 号（2010 年 2 月 1 日発行）に「塔望遠鏡ドームの雨漏り工事終了、ただ今の住民は「たぬき」」という記事を書いた。塔望遠鏡は文化庁に登録した有形文化財である。昭和 41～42 年頃の観測を最後に長い眠りについていた。最近、雨漏りがひどくなったのでドームの屋根材をすっかり取り替える大工事を行った。屋根が新しい銅板に変わり、金ぴかに輝いていたドームは早輝きを失い貫禄さえ見せ始めている(写真 1)。

写真 1　早、貫録を見せ始めたドームの輝き

この雨漏り工事を機に塔望遠鏡の建物の有効利用を考え、止められていた電力を回復する工事を行った。この塔望遠鏡は昭和 5 年(1930 年)に出来たもので 80 歳の年月を経ており、壁などかなり老朽化しており工事にはかなり手間取ったが、とにかく電力が回復し、懐中電灯を手に入っていた暗い分光室に明かりがともった。明かりが灯り中の様子はよくわかるようになってその荒れように驚いている。この塔望遠鏡の更新された望遠鏡が昭和 42 年（1967 年）に岡山天体物理観測所に建設された 65cm クーデ型太陽望遠鏡である。この役目を終えた塔望遠鏡は、ドーム内のシーロスタット、塔の中の望遠鏡部分はそのままの姿をとどめているが、分光器室の、他でも使用可能な光学素子の多くは取り外され岡山天体物理観測所などで有効利用のため持ち去られており、分光器室は見るも無残な荒廃の限りであった。

しかし、分光器室は 7mX21m のかなり広い空間があり、有効利用を考え、この度、電力回

復を行ったのである。写真 2、3 が明かりの点いた分光器室である。

写真 2　分光器室、南から北を望む

写真 3　分光器室　北から南を望む

分光器室はこのように蛍光灯で明るくしたが塔望遠鏡部分は建設時の証明の面影を残した照明にした（写真 4）。趣はあるのだが、いささか明るさが足りないようにも思える。この機に火災報知機、非常口の案内灯も備え、電話回線、LAN も引いた。塔望遠鏡入り口の外

灯（写真 5）もしゃれたものなっている。

写真 4　塔望遠鏡部分の照明灯

写真 5　塔望遠鏡玄関の外灯